古代日本語におけるソ（ゾ）による係り結びの焦点範囲について

勝又　隆　（福岡教育大学）

1　はじめに

上代のソの係り結び

（1）初秋風涼しき夕解かむと**そ**（等香武等曾）紐は結び<u>し</u>（比毛波牟須妣之）妹に逢はむため　　（万葉集・巻20・4306）

〔初秋風の涼しい七夕にまた解こうとて紐は結んだのだ妻に逢うために〕

（2）秋と言へば心**そ**<u>痛き</u>（許己呂曾伊多伎）うたて異に花になそへて見まく欲りかも　　（万葉集・巻20・4307）

〔秋ともなれば心が痛む　なんだか不思議に花に見立てて逢いたく思うからだろうか〕

1　はじめに

- （1）は、紐を結んだ理由を「初秋風涼しき夕解かむと」という部分で述べており、ソの上接語句が新情報で「紐は結びし」は旧情報とする解釈ができる。
  ただし、「七夕歌八首」と題された歌の一首目であり、紐を結んだこと自体も新情報とする解釈もできる。

- （2）は、「秋と言へば」の帰結部として「心そ痛き」と述べており、「痛き」も新情報である。これも（１）に続く七夕の歌であり、「うたて異に花になそへて見まく欲りかも」が「秋と言へば心そ痛き」という事態の原因に言及しており、「心」だけが新情報とする解釈は歌意が通らない。

1　はじめに

- （焦点＝新情報とした場合、）係助詞の付いた句だけが必ずしも焦点とは言えないことが、しばしば指摘されている。（小田勝（1989）、野村剛史（2001）、勝又隆（2009）など）

  野村（2001）では、係り結び構文の焦点について「情報伝達上の重要な要素」という言葉で広く捉えている。

- 「伝達上、何が問題となっているか」という観点から考えても、（1）は上接語に焦点があると言えそうだが、（2）は何が痛いのかではなく、「秋と言へば『どうなのか』が問題になっているため、「心そ痛き」に焦点があるとした方が矛盾がない。

1　はじめに

- 以下の例も、述語が新情報に含まれる例である。

（3）秋萩を散らす長雨の降るころは（零比者）　ひとり起き居て恋ふる夜**そ**多き（戀夜曽大寸）　（万葉集・巻10・2262）
〔秋萩を散らす長雨の降る頃は独り起きていて恋い慕う夜が多い〕

（4）味酒のみもろの山に立つ月の見が欲し君が馬の音**そ**する（馬之音曽為）　（万葉集・巻11・2512）
〔（味酒の）　三諸の山に出る月を待ちかねるように逢いたいあなたのお馬の足音が聞えてきました）

1　はじめに

- （3）は「秋萩を散らす長雨の降るころは」が主題であり、新情報としては「ひとり起き居て恋ふる夜**そ**多き」全体が該当する。

- （4）は主題が提示されておらず、恋する相手の来訪を告げる馬の足音が聞こえたことだけを詠んでおり、一首全体が新情報として示されている。

- ソは『万葉集』に400例近く見られる（日本語歴史コーパス（国立国語研究所）で389例）が、(2)～(4)のように述語も新情報に含まれていると見なせる例が圧倒的に多い。

1　はじめに

- また、以下の例は、述語も新情報と見なすことはできるが、ソの上接語が先行する語と対比して示されており、「情報伝達上の重要な要素」という意味では、上接語だけを焦点と見なすことができる。

（5）<u>咲く花の色は変らず</u>（咲花乃色者不易）　ももしきの大宮人**ぞ**
（大宮人叙）<u>たち変りける</u>（立易奚流）　（万葉集・巻6・1061）
〔咲く花の色は当時と変っていない（ももしきの）　大宮人だけが移り変ってしまった〕

ただし、「情報伝達上の重要な要素」を（2）の「秋と言へば心そ痛き」にも広げて、主観的には「心」に力点を置いているのだとしてしまうと、ソが付いているから焦点だということになってしまうため、本発表ではその立場は取らない。

1　はじめに

- 本発表では、『万葉集』に見られるソの係り結びを対象に、ソの出現位置について、ソと他の補語との位置関係として見ても、基本的にソが述語に近い位置に現れる傾向にあること、介在要素としては主語が最も多く現れ、主語にガが付く際はソが述語を分割する等の**述部に現れる例**に最も多く現れることを指摘する。
- 次に、ソの係り結びの対比とそれ以外の用法について、焦点範囲にどのようなバリエーションがあるのかについて検討し、ソの係り結びの特徴について考察する。
- また、コソによる係り結びとも適宜比較する。

2　ソの出現位置―先行研究

小田勝（1989）

：中古の「ゾ」に関して「ゾ」と述語の間に介在要素が現れにくいことを指摘。述語句を極力「―ゾ＋述語」のみで構成することで、強調の効果を生んでいるものと説明。

（→述語も焦点に含む用法が中心）

勝又（2009ｂ）

：小田と同様の傾向を『万葉集』で確認。介在要素としては、コソ・ヤ・カの係り結びと比べてヲ格補語が現れにくいことを指摘。また、ソが付く要素としては、他動詞文では目的語、自動詞文では主語がそれぞれ最も多いことを指摘。

（→述語も焦点に含む用法が中心）

3　ソの出現位置―介在要素が無い場合

- ソより前には「あらし吹く夜**は**君をし**そ**思ふ」（万葉集11・2679）や「秋と言え**ば**心**そ**痛き」（（2））のように、ハや従属節しかない場合もあるが、他の補語が現れる例も珍しくはない。

（6）名児の海を朝漕ぎ来れば海中**に**（海中尓）　鹿子**そ**鳴くなる（鹿子曽鳴成）あはれその鹿子　（巻7・1417）
〔名児の海を朝漕いで来ると海の中で鹿子が鳴いている　ああいとしやその鹿子〕

（7）難波津を漕ぎ出て見れば神さぶる生駒高嶺**に**（伊古麻多可祢尓）　雲**そ**たなびく（久毛曽多奈妣久）　（巻20・4380）
〔難波津を漕ぎ出して見ると神々しい生駒の高嶺に雲がかかっている〕

3　ソの出現位置―介在要素が無い場合

（8）汝をと我**を**（汝乎与吾乎）　人**そ**離くなる（人曽離奈流）　いで我が君人の中言聞きこすなゆめ　（巻4・660）

〔あなたと私を他人（の噂）が引き離そうとしているようです。さああなた人の中傷を決して聞こうとしないでください〕

（9）向つ峰に立てる桃の木ならめや**と**（将成哉等）　人**そ**ささやく（人曽耳言為）汝が心ゆめ　（巻7・1356）

〔向こうの山に生えている桃の木は実がなるものかと人がささやいている　しりごみしてはいけないよ〕

（10）大夫と思へるものを太刀佩きて可尓波の田居**に**芹**そ**摘みける（可尓波乃多為尓世理曽都美家流）　（巻20・4456）

〔ますらおと思っておりましたのに大刀を佩いて綺田の田んぼで芹なぞお摘みになって〕

3　ソの出現位置―介在要素が無い場合

（11）世間**を**常なきもの**と**今**そ**知る（世間乎常無物跡今曽知）奈良の都のうつろふ見れば　（巻6・1045）
〔世の中が　無常なものと　今こそ思い知った　奈良の都のさびれるのを見ると〕

- （6）～（9）は主語にソが付いて、ニ・ヲ・トが先行している例、（10）は目的語にソが付いてニが先行している例、（11）は時を表す「今」にソが付き、ヲとトが先行している例である。
- また、「―ヲ―ハ―ニソスル」と途中にハが入る例もある。

（12）畑子らが夜昼といはず行く道**を**我れ**は**ことごと宮道**にぞ**する（行路乎吾者皆悉宮道叙為）　（巻2・193）
〔畑子たちが夜昼となく行く道をわれわれ舎人はそのまま参道にしている〕

4　ソの出現位置―介在要素がある場合

- 以下の表は、係助詞と述語の間に現れる要素には何がどのくらいあるかを調べたものである。

〈表〉『万葉集』係助詞と述語との介在要素

	ソ（398）	コソ（167）	ヤ（228）	カ（516）
主語	**66(16.6%)**	18(10.8%)	29（12.7%）	86（16.7%）
目的語	**10(2.5%)**	22(13.2%)	27(11.8%)	53(10.3%)
与格補語	**15(3.8%)**	15(9.0%)	24(10.5%)	50(9.7%)
その他の格	**1(0.3%)**	8(4.8%)	7(3.1%)	18(3.5%)
従属節・副詞	**23(5.8%)**	45(26.9%)	37(16.2%)	118(22.9%)
合計	115(28.9%)	108(64.7%)	114（50%）	295(57.2%)

%はそれぞれの係助詞ごとの出現率だが、一文に2つ以上の要素が現れる場合も含んでいる。勝又(2009b)より。

4　ソの出現位置―介在要素がある場合

- 表からソの場合は介在要素の出現率が他の係助詞に比べて全般的に低いことと、主語の出現率だけは16.6%と高い（コソが10.8%で最も低く、カが16.7%で最も高い）ことがわかる。
- 主語がソと述語との間に現れる際に、ソが付く要素の内訳は以下のとおり。なお、ガはすべて「我」に付き、ハは「我」の他、「君」や「人」「雪」「雨」なども見られる。

〈ガの場合〉

述部（思ひそ我がする、言挙げぞ我がする等）：12例

格助詞ソ―主語ガ―：12例

〈ヲ〉4 例　〈二〉5 例　〈ユ〉1 例〈ト〉2 例

副詞的成分（今／ひとり／なづみ等）：9例

従属節（出でてそ我が来し／待ちつつそ我が恋ひ渡る等）：8例

４　ソの出現位置―介在要素がある場合

〈ハの場合〉

連用修飾：13 例

格助詞ソ―主語ハ―：10例（〈二〉6 例　〈ト〉4 例）

従属節：2 例

〈ノの場合〉

従属節：2 例　副詞的成分：2 例

〈無助詞の場合〉

格助詞ソ―主語（φ）―：2例（〈二〉1例　〈ト〉1例）

- ガは格助詞と並んで述部の例が最も多く、中でも「思ひそ我がする」が８例と動詞を分割する例が目立つ。ノは全体で4例と少なく、ハは連用修飾の13例が特徴的である。

４　ソの出現位置―介在要素がある場合（補足）

●述部に現れる場合については、以下のようなパターンがある。

［1］動詞を分割する

思ふ　→　思ひそ我がする（８例）

嘆く　→　嘆きそ我がする（１例）

［２］サ変動詞に介在する

手向けそ我がする／言挙げそ我がする／丸寝そ我がする

（各１例）

➢ソと述語が隣接している場合も、ソは12例で述部に現れる。

名詞＋にそありける（３例）／名詞＋にそある（2例）／

わびそしにける／片思ひそする／足占をそせし／

見ずそあるべくありける／止めそかねつる／ありそかねつる／

見まくそ欲しき（各1例）

４　ソの出現位置―介在要素がある場合（補足）

- コソが述部に現れる例は、『万葉集』に３例が見られる（似てこそありけれ、逢はずこそあれ、名にこそあれ）が、介在要素が現れる例は無い。
  - 他に宣命に「定め賜はぬにこそあれ」「悟し給ふにこそあれ」の2例がある。なお、「思ふ→思ひこそすれ」「嘆く→嘆きこそすれ」のような一語の用言や助動詞を分割する例は見られない。（上代はニアリとナリが混在しているため、「名にこそあれ」等がナリを分割しているとは言えない。また、上代に連体ナリの確例はないため、宣命の例をナリに介入した例と見なすことはできない。）
- 中古の場合は述部にコソが現れる例は珍しくない（特にニコソアレ（アラメ／アメレ／アリケレ等が目立つ）ので、その点は上代と中古の差異と言える。なお、中古のゾも述部に現れる例は多い。

5　ソの出現位置―ここまでのまとめ

- ソが述語に隣接する傾向にあることは、他の補語との位置関係を踏まえても、基本的には同様であると言える。（他の補語が現れないから隣接している例が多いというわけではない。）

- 介在要素が現れる場合も、主語以外の補語は現れにくく、ガが述語分割の際によくソと述語の間に現れる点からも、「―ソ句」と述語とがひとまとまりになって、焦点を作っているという小田（1989）の考察と一致する。

琉球語の研究との関連で言えば、ソの出現位置は右端に近い位置に現れやすいという傾向（規則ではない）がある。なお、上代の場合、活用語が述語となる文の文末にソが現れる例（「…連体形＋ソ。」）は『万葉集』に15例であり、表現性も係り結びとは異なる。（勝又（2009a））

6　コソの出現位置

- コソについては、中古の場合はゾと同様の傾向であることが小田（1989）で指摘されているが、表でも示したとおり、上代の場合はコソと述語の間に補語が現れることは決して珍しくない。

- また、上代のソが従属節に付く場合は主に付帯状況的な意味を表すテ節（27例）とツツ節（18例）が多く、原因理由を表す已然形は3例、ミ語法は1例と少ない。しかし、コソの場合は已然形に20例、ミ語法に10例が下接する一方で、テ節には3例、ツツ節は0例である。コソは「未然形＋バ」に付く例も多く、ソとは文構造的に異なる可能性が高い。

6　コソの出現位置

- なお、テ節のうち1例は「似てこそありけれ」（巻8・1584）というタリ相当の形式に付いたものであり、他2例は以下のように、継起的・原因理由的な意味を表すテ節であり、ソの場合に多く見られるような付帯状況的な用例は見られない。

（13）我妹子がやどの秋萩花よりは実になりて**こそ**（許曾）　恋増さりけれ　（巻7・1365）

〔愛妻の庭の秋萩は花が咲いていた時より実を結んでのちにこそ恋しさが増したことだ〕

（14）川上の根白高萱あやにあやにさ寝さ寝て**こそ**言に出にしか　（巻14・3497）

〔川上の根白高がや あやにあやに―ねんごろにたっぷり寝たあと噂に上った〕

6　コソの出現位置（補足）

コソの介在要素はどういう場合によく現れるのか？

- コソの係り結びにおいて、コソと述語の間に介在要素がよく現れるのは、以下のような要素にコソが下接する場合である（用例数は一文に複数個現れる場合も１例としている）。

  従属節（已然形・ミ語法・未然形＋バ等）：48例中46例

  ※述語省略や疑似分裂文（…ハ…コソ。）を除く。

  副詞（カク＋シ）：10例中8例（他にカクノミ1例）

  副詞ウベシ：4例中4例

  目的語（ヲ格）：14例中9例

  - 「今」「昔」等、時を表す要素も半分以上、補語にも半分程度は介在要素が現れるが、主語にコソがつく場合に介在要素が現れる割合は49例中12例とやや少ない。

6　コソの出現位置（補足）
コソの介在要素はどういう場合によく現れるのか？

- ソの場合は、従属節55例中18例に介在要素が現れる。出現率では、二格（ニソ）が26例中16例と多い。

- ソの係り結びにおいて、従属節が原因理由節の場合はすべて介在要素が現れるが、『万葉集』に4例と用例自体が少ない（中古も原因理由節にゾが付く例は少ない）。

- 従属節に付くソ（ゾ）とコソの分布は、上代と中古で異なる。介在要素の出現率に影響しているか（未調査）。

6　コソの出現位置（補足）
コソの介在要素はどういう場合によく現れるのか？

（参考）ソの係り結び：原因理由節の例（下線部が介在要素）

（15）朝髪の思ひ乱れて**かくばかり汝姉が恋ふれそ**夢に見えける
（名姉之戀曽夢尓所見家留）（巻4・724）

（16）**かくしつつあらくをよみぞ**（在久乎好叙）たまきはる短き命を長く欲りする（短命乎長欲為流）（巻6・975）

（17）我が待ちし秋は来りぬ妹と我れと**何事あれそ**紐解かずあらむ
（何事在曽紐不解在牟）（巻10・2036）

（18）時々の花は咲けども**何すれそ**（奈尓須礼曽）母とふ花の咲き出来ずけむ（佐吉泥己受祁牟）（巻20・4323）

7　ソの係り結びによる対比（概要）

- ソの係り結びにおける「対比」には以下の４種（『万葉集』に31例）が見られる。
  ①　「Aではなく、Bが〇〇である」と、並行する事態を否定する。
  ②　「AよりもBの方が〇〇である」と、並行する事態は否定しないが、比較の含意を持つ。
  ③　「Aは…だが、Bは〇〇である」と、逆接の連接関係で別事態が対比される。
  ④　「Aは…であり、Bは〇〇である」と、二つの事態の存在が並列的に示される（否定や比較、逆接の含意なし）
- Bがソが付く語句に当たり、④はA、B両方にソが付く場合もある。述語が実質的に共有される①②に対し、③④は述語が異なる。

8　対比以外の用法（概要）

- また、疑問詞疑問文が『万葉集』に16例見られる。

（19）恋は今はあらじと我れは思へるを<u>いづくの恋</u>**そ**（何處戀其）
　　つかみかかれる（附見繋有）　　（巻4・695）
〔もう恋とは縁が切れたとわたしは思っていたのにどこに隠れていた恋めが取りついてきたのであろうか〕

  - このように、ソは疑問文にも現れるが、平叙文の例が大半である。したがって、ソに疑問文であることを示すような機能は無い。同様に、上代の場合は平叙文であることを示す機能も認めにくいが、推量系助辞が現れにくいという特徴はあるため、文タイプと何らかの関連がある可能性はある（堀尾（1991）、勝又（2005））。

- ソの係り結びの大半の用例は対比でも疑問詞疑問文でもなく、（1）（2）のような並行する事態の含意の無い例である。

9　ソの係り結びによる対比　①

- ①の**並行して存在する事態を否定する含意**を持つ例は『万葉集』に8例見られる。新情報という意味では述語も焦点に含むと言えるが、否定文が先行しているため、述語が導入済みという意味では相対的に上接語の重要度が高いとも言える。

（20）我が命は惜しくもあらず（吾命者惜雲不有）　さ丹つらふ**君によりてそ**（君尓依而曽）　長く欲りせし（長欲為）
（巻6・3813）
〔わたしの命は惜しくなんかないうるわしい君ゆえにこそ長かれと願ったのです〕

（21）春日山雲居隠りて遠けども家は思はず（家不念）　**君をしそ**思ふ（公念）
（巻11・2454）
〔春日山が雲に隠れて遠いように離れていますが家族のことは思わずあなたのことばかり思っています〕

10　ソの係り結びによる対比　②

- また、②の並行して存在する事態との**比較**を表し、述語を共有している例は4例見られる。述語は「―ソ―連体形」文に現れているため、新情報ではあるが、「何と何を比較しているのか」という発話意図の点では上接語の情報的な価値は高いとも言える。

（22）今のみのわざにはあらず いにしへの人**そ**まさりて（古人曽益而）音にさへ泣きし（哭左倍鳴四）　（巻4・498）
〔今の世だけのことではありません古の人こそもっと恋の苦しさに声を放って泣きさえしたものです〕

（23）人よりは（比等余里波）　妹**そ**も悪しき（伊毎曽母安之伎）
恋もなくあらましものを思はしめつつ　（巻15・3737）
〔わたしよりはあなたこそ困った人だ　恋もなくいられたらよいのに物思いをさせて〕

11　ソの係り結びによる対比　③

- ③の、逆接の連接関係を構成するものは4例見られる。これらは並行する事態と述語が異なるため、述語も焦点に含むと考えて良いだろう。

（24）我が欲りし野島は見せつ底深き阿胡根の浦の玉**そ**拾はぬ（珠曽不拾）（巻1・12）
〔わたしが見たいと思っていた野島は見せてもらった
しかし底の深い阿胡根の浦の真珠はまだ拾っていません〕
（25）我が待ちし秋は来たりぬしかれども萩の花**そも**いまだ咲かずける（芽子之花曽毛　未開家類）（巻10・2123）
〔わたしが待った秋はやって来た　だがしかし萩の花はまだ咲いていない〕

12　ソの係り結びによる対比　④

- さらに、否定や比較の含意を含まず、二つの事態を並列的に示す例が15例見られる。述語も含む事態が焦点と考えられる。

（26）藤井の浦に鮪釣ると海人舟騒き　塩焼くと人**そ**さはにある
（塩焼等人曽左波尓有）　（巻6・938）
〔藤井の浦に鮪を釣ろうと海人舟は騒ぎ　塩を焼こうと人はいっぱい集っている。〕

（27）やすみしし我が大君の見したまふ吉野の宮は山高み雲**そ**たなびく（雲曽軽引）　川早み瀬の音**そ**清き（湍之聲曽清寸）……　（巻6・1005）
〔（やすみしし）　わが大君がお出ましになっている吉野の宮は山が高いので雲はたなびき川の流れが速いので瀬の音が清らかです〕

13　コソの係り結びの場合

●半藤英明（1993）は、コソの機能として以下の3種を挙げている。

イ「結合排他」の用法

並行する事態を否定する含意のある例であり、先に挙げたソの係り結びの①と③に当たる（（28）が①、（29）が③）。

（28）翼なすあり通ひつつ見らめども人**こそ**知らね松は知るらむ
（巻2・145）

〔御魂は鳥のように行き来しながら見てもいらっしゃるだろうが人には分らないだけで松は知っていよう〕

（29）昔**こそ**（社）　難波ゐなかと言はれけめ今都引き都びにけり
（巻3・312）

〔昔こそ難波田舎と言われたろうが今は都に做ってすっかり都会らしくなった〕

13　コソの係り結びの場合

- コソは逆接の従属節を構成するため、並行して存在する事態に先行して現れる。一方、ソの係り結びの場合は、すでに見たとおり、並行する事態が先に示され、ソの係り結びが後置される。

ロ「結合卓立」の用法

並行事態と比較する用法で、ソの係り結びの②に当たる。

（30）我妹子がやどの秋萩花よりは実になりて**こそ**（許曾）　恋増さりけれ　（巻7・1365、（13）再掲）

〔愛妻の庭の秋萩は花が咲いていた時より実を結んでのちにこそ恋しさが増したことだ〕

13　コソの係り結びの場合

ハ「結合強調」の用法

並行する事態が特に想定されていないものであり、対比的な含意が読み取れないものである。ソの係り結びでは、この用法に当たるものが最も多い。

- ただし、ソは「強調」と見なしにくい例も多いため、発表者はソの係り結びが「強調」を表す機能を持つとは考えていない。

（31）　天皇の御代万代にかくしこそ（許曾）　見し明きらめめ立つ年の端に　（巻19・4267）

〔天皇の御代万代もこのように御宴を催して御心をお晴しください年が改るたびに〕

- 半藤によれば、上代においてはイが68.4%、ロは6.5%、ハは25.1%であるとしている。ソの係り結びの場合、対比は並列（④）を含めても8%程度であり、用法の分布は大きく異なる。

14　ソの係り結びの対比以外の用法

- 疑問詞疑問文は当然、上接語句が焦点となる。また、すでに述べたとおり、上代のソの係り結びで大半を占めるのが、対比でも疑問詞疑問文でもない、一般に「強調」と言われる用法である。

（32）秋萩の上に白露置くごとに見つつ**そ**偲ふ（見管曽思怒布）君が姿を　（巻10・2259）
〔秋萩の上に白露が置くたびにそれを見て思う　君のお姿を〕

（33）いにしへゆあげてし服も顧みず天の川津に年**ぞ**経にける（年序經去来）　（巻10・2019）
〔以前から手がけた織物も顧みないまま天の川津で一年が過ぎてしまった〕

14　ソの係り結びの対比以外の用法

- 冒頭でも述べたとおり、述語までが焦点に含まれると考えられる例が多い。
- （32）は白露が置く度に「君が姿を」思い浮かべると言っていることからすると、「偲ふ」が相対的に「見つつ」よりも情報の重要度が低いと解釈することは考えにくい。また、（33）の「年ぞ経にける」の「ける」はいわゆる気づきのケリであると考えられる。時の経過に改めて気づいたことが歌意である。
- しかし、対比や疑問詞疑問文以外にも、上接語を焦点と見なせる例がないわけではない。以下の２例は述語が旧情報であることが確かに読み取れる。

14　ソの係り結びの対比以外の用法

（34）梓弓弦緒取りはけ引く人は後の心を知る人そ引く（知人曽引）（巻2・99）

〔梓弓に弦をはめ込み　引く人は　後の心を　知っているからこそ引くのです〕

（35）風流士に我れはありけりやど貸さず帰しし我れ**そ**風流士にはある（令還吾曽風流士者有）（万葉集2・127）

〔風流人でやっぱりわたしはあったのだ　泊めないで帰したわたしこそ真の風流人だったのだ〕

- （34）は係り受けがややおかしい例だが、「引く人は」で述語「引く」がすでに示されている。（35）も「風流士に我れはありけり」で言及済みで、明らかに旧情報である。

14　ソの係り結びの対比以外の用法（補足）

- また、すでに見た原因理由節にソが付く場合も上接語句にだけ焦点がある解釈ができるものがある（（15）（16）（18））。
- しかし、これらはソの係り結びには用例が少なく、コソの係り結びによく見られるタイプの例である。

（15）朝髪の思ひ乱れて**かくばかり汝姉が恋ふれそ**夢に見えける
（名姉之戀曽夢尓所見家留）　（巻4・724・再掲）
〔（朝髪の）思い乱れてこんなにもあなたが恋しがるからこそ夢にまで見えたのだわね〕

（16）**かくしつつあらくをよみぞ**（在久乎好叙）たまきはる短き命を長く欲りする（短命乎長欲為流）　（巻6・975・再掲）
〔こうやっているのが良いからこそ（たまきはる）短い命でも長かれと願うのだ〕

14　ソの係り結びの対比以外の用法（補足）

（17）我が待ちし秋は来りぬ妹と我れと**何事あれそ**紐解かずあらむ
（何事在曽紐不解在牟）　（巻10・2036・再掲）
〔待ちに待った秋はやって来た　妻とわたしは何事があろうと紐を解かずに置こうか〕

（18）時々の花は咲けども**何すれそ**（奈尓須礼曽）母とふ花の咲き出来ずけむ（佐吉泥己受祁牟）　（巻20・4323・再掲）
〔四季折々の花は咲くのに なんでまあ母という花は咲き出さなかったのだろうか〕

- ただし、（17）は「何事があるからといって紐を解かないことがあるだろうか（いや必ず解くのだ）」という反語であり、未実現事態に関する意志表現である。よって、述部も新情報と見なせる。

15　まとめ

- ソの出現位置からすると、ソは述語に近い位置に現れる傾向にある。介在要素が現れる場合も、述語に近い位置に現れていると考えて矛盾しない。
- また、従属節にソが付く場合をコソと比較すると、ソが付く要素は構造的にも述語に近い位置に生起するものである可能性が見出せる。
- ソの係り結びの焦点範囲については、上接語のみが焦点となることもあるが、述語まで焦点に含むものと見なしても解釈上の矛盾が生じない例が中心である。このことは、ソの出現位置に関する調査結果からの推定と合致する。

参考文献（１）

石田春昭（1938）「コソケレ形式の本義（上・下）」）」『国語と国文学』16-2, 16-3
大野　晋（1993）『係り結びの研究』岩波書店
小田　勝（1989）「出現位置からみた係助詞「ぞ」」『国語学』159
鴻野知暁（2010）「ゾの係り結びの発生について」『国語国文』79-12
近藤泰弘（2007）「平安時代語の接続助詞「て」の機能」『國學院雑誌』108-11
（2012）「平安時代語の接続助詞「て」の様相」『国語と国文学』89-2
阪倉篤義（1993）『日本語表現の流れ』岩波書店
佐佐木隆（1992）「上代語における「―か―は―」の構文」『国語国文』61-5
新里瑠美子（2018）「古代語の係り結び・現代語のノダ構文・沖縄語の係り結びの比較」
高田博行・小野寺典子・青木博史『歴史語用論の方法』ひつじ書房
野村剛史（1993ａ）「上代のノとガについて（上）」『国語国文』62-2
（1993ｂ）「上代のノとガについて（下）」『国語国文』62-3
（1995）「カによる係り結び試論」『国語国文』64-9
（1996）「ガ・終止形へ」『国語国文』65-5
（2001）「ヤによる係り結びの展開」『国語国文』70-１
（2005）「中古係り結びの変容」『国語と国文学』 82-11

参考文献（２）

永井　洸（1938）「係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」の本質意義に就いて」『国文学攷』4-1

林　由華（2017）「南琉球宮古語池間西原方言におけるdu 焦点構文と述語焦点形」
『阪大社会言語学研究ノート』15（pp.87-99）

半藤英明（1993）「古典語「こそ」の働き　取り立ての観点から」『國學院雑誌』94-6
（『係り結びと係助詞「こそ」構文の歴史と用法』（2003、大学教育出版）所収）

堀尾香代子（1991）「「万葉集」における係り結び「ぞ」「こそ」」『愛知大学国文学』31
（1995）「上代語における係助詞「こそ」の構文上の特徴　「ぞ」との相違」
『表現研究』62

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店

Miyagawa,Shigeru 1989 Development of Accusative Marker “Syntax and Semantics 22”

宮坂和江（1952）「係結の表現価値―物語文章論より見たる」『国語と国文学』29-2

柳田優子（2003）「上代語の句構造と語順の制約について」筑波大学『言語文化論集64』
（2006）「古代語における動詞連体形節内における格付与について」
Scientific approaches to language 5（神田外語大学）

参考文献（３）

勝又　隆（2005）「上代「―ソ―連体形」文における話し手の認識と形容詞述語文」
『日本語の研究』1-4

（2007）「上代「ーコソー已然形」節の機能とその変遷について」『国語国文』76-4

（2009a）「上代における「連体形＋ソ」文について」『国語と国文学』86-7

（2009b）「語順から見た強調構文としての「―ソ―連体形」文について」
『日本語の研究』5-3

（2012）「古代日本語における係助詞ソ（ゾ）の出現傾向について」
『日本言語学会第145 回大会予稿集』日本言語学会

（2015）“On the position of the Old Japanese kakari particle so and the focus expressed by the clause”（上代における係助詞ソの出現位置と文の焦点について）　国際ワークショップ:「比較的観点から見た係り結び」
国立国語研究所、発表資料

（2018）「上代日本語におけるソの係り結びと連体節について」NINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウム 「通時コーパスに基づく日本語文法研究」
国立国語研究所、発表資料

調査資料

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』

バージョン2019.03 https://chunagon.ninjal.ac.jp/

- 本研究は、令和２ 年度科学研究費補助金（課題番号18K00616）及び国立国語研究所の共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の研究成果の一部である。